

---

# Alter Ego

est

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Alter Ego

### 【NZコード】

N9974A

### 【作者名】

est

### 【あらすじ】

大切なヒトに、あなたは何を感じますか？

## (前書き)

初のBL作品です。とはいっても、極度に嫌悪される方以外には問題なく読めるレベルだと思います。BLと言えるほどに恋愛している作品ではないので。

あと、全体的にグロテスクな描写があるので苦手な方は控えられた方が良いと思います。雰囲気的にはPG-12な状態なので精神的に大人でない方も控えられた方が無難です。

「うう……」

そのマンションの一室に入つて、まず彼女を感じたのは、生臭い鉄分の臭いだつた。

雨戸が閉めきつてあるのに文明の灯りもない部屋の、唯一の知覚情報。

確かに今までいた外は明るく、腕の時計はバックライトの恩恵で正午を示しているにも関わらず、この場だけが丑三つ時であるかのような錯覚を起こさせる。

「よう、遅かつたじやん。どんなマヌケな面さげてここに来た？」

そんな部屋の中央で床に座つている青年が、蠟燭で自身の顔を照らしながら躊躇なく問う。

片目に眼帯という歪さに由を瞑れば端正で細身な顔立ちは、炎に照らされて、より一層不気味さを醸し出している。

蠟燭が二人の間を照らすと、女性のきちんとした服装とは対照的に、青年はズボンに真つ赤なシャツ一枚の貧相な格好というのがわかつた。

「……あの人は、どこへ行つたの？」

異臭を堪えつつ、愚問だとわかつても問わなくてはいけない。そもそも彼女がこの場所にきた目的こそが人探しであるからだ。

話は数時間前までさかのぼる。

彼女の婚約者がその実弟と失踪した、正確には、実弟に誘拐された。気付いたのは彼女が徹夜明けの仕事から帰つてきてから、テレビの上の大惨事になつてゐる朝食と『一人で来い』という実弟の名前入りの置き手紙を見た時だつた。義母と実父に相談してみたが

初耳だつたらしく何も知らなかつた。だが、弟の住居は実父が把握していたので連絡を取るという「一人の声を無視して、急いで彼女がこの場にやつてきて、今に至る。

不幸なことに、彼女は利口だつた。

部屋に入った時から、ある種の覚悟はあつた。この匂いの元がかつて何だつた【のか見当がついてしまつていた。しかし……】

「ここにいるわ……ちゃんとな……」

青年が立ち上がり、蛍光灯に灯りを灯した。

「…………」

そこにあつたのは……

「！！ 嫌あああアアアアアああアアツーーー！」

想像を絶する光景だつた。

この世のものとは思えない彼女の絶叫の先には、ぶちまけられた血の海があつたわけでも、細切れにされた肉塊があつたわけでもない。

赤い液体の溜まつた水槽と空の注射、人間だつた痕跡の残る破片があつた。パートとしてはとてもキレイに保存されていて、必要以上の出血が起こらないように止血もされて、防腐処理も施されている。断面を見なければ精巧なマネキンの部品にしか見えない。あるいは残酷とは程遠く、ただ繋がつてヒトの形を成していないだけで、それらが生命の尊厳を嘲笑うかのように床に並べられていた。シャツは作業中に着ていたものだろう、その赤は紛れもなく血の赤だつた。

整つているが故の異常状況。

「ナニ悲鳴あげてんだ、慈悲の心で今の冗貴をみせてやつたのに。

…やっぱり俺は正しかつたよ、兄貴」

そんな彼女を嘲笑い、青年はサッカーボールぐらいの大きさの物体……今は物言わなくなつた男の頭を、抱き締めて愛しそうに撫でた。

「…ウツ…」

胃の中から戻つてきそうな夜食を無理矢理押し止めて、ショックでふらつく体を壁に手を着いて必死に支える。

不幸なことに、彼女は強かつた。

狂つてしまえるなら、その方がはるかに楽だつたらう。

「……どうして」

嗚咽混じりの声で、かろうじて出た言葉。理由など何であれ、彼は還つてこないのに、本当の愚問を口に出す。

「兄貴をこうした理由か？簡単な事だぜ」

だが、青年はなおも軽快な口調で自分の行いを認めて問う。

「……どうして…」

「足を切り離したかつて？ 兄貴が勝手に他のヤツに会いに行かなによつて」「言つてから、青年は腿から下しかない足のふくらはぎを優しく撫でる。

「……どうして…」

「手を切り離したかつて？ 兄貴が勝手に他のヤツに触れなによつて」

言つてから、青年は糸で縫われて開かない皿蓋にキスをする。

「…どうして…」

「皿蓋を縫い合わせたかつて？ 兄貴が他のヤツに色々を使わないよつて」

言つてから、青年は糸で縫われて開かない唇にキスをする。

「…どうして…」

「唇を縫い合わせたかつて？ 兄貴が他のヤツと口をきかなかよつて」

「」

言ってから、青年は糸で縫われて開かない唇にキスをする。

「鼻をFRPで埋めたかつて？ 兄貴が他のヤツの匂いを嗅がないよつに」

言つてから、青年は糸で縫われて閉じられた鼻孔にキスをする。

「…………どうして」

「耳を石膏で塞いだかつて？ 兄貴が他のヤツの声を聞かないよう

に

言つてから、青年は糸で縫われて閉じられた耳にキスをする。

「…………どうして……」

「首を切つたかつて？ これは俺が我儘で抱きたかつたから  
頭部は青年の腕のなか、唾液でベトベトになつていた。」

彼女が言葉を続ける前に、青年は回りくどくその先を潰していく。  
うつむいたまま言葉を続ける彼女も、考えることを放棄したよう  
に、機械のように【どうして】を繰り返した。

「どうして…………どうして殺したの！？」

「兄貴が俺よりテメエを選ばととしたからだ」

涙ながらの彼女の疑問に、青年は速答した。

「…………返して」

「は？」

「あたしの大切な人を返しなさいよつ！！！ 返せつ！！！」

彼女の感情が爆発した。絞殺しそうな勢いで青年に掴み掛かる。  
不幸なことに、彼女は理知的だつた。

殺せてしまえば少しばかり晴れたかもしれないのに。

青年は抵抗らしい抵抗を見せず、されるがままで頭がガクガクと  
揺らされる。だが、腕に抱いた頭部だけは決して離そうとしなかつ  
た。

「返して！ 返して！ 返してつ！」

「なに言つてやがる、兄貴はここにいる。ただ生きてないだけだ」

「ふざけないで！！」

当然の如く言う青年に、怒りを顕にする女性。

「そんなのおかしいわ！ 意味がわからない！ 狂つてるわよ！」

「まあ、狂つてるのは認めてやるよ。ところでお、人間社会が初めて犯罪とした行為つて知ってるか？」

「あんたみたいな殺人に決まってるじゃない！！」

「はずれ。社会が初めて【罪】とした事は、殺人でも強盗でも強姦でもねえ。……近親相姦だ」

「 ッ」

近親相姦。その言葉を聞いた彼女の動きが止まる。

「いつまで拘んでんだ。放せよ」

青年に押されると、彼女は力なくよろめいて離れた。

「テメエを義姉と呼ぶのは反吐が出るぜ。血が繋がつていねえのは救いだがな」

そして、青年はしてやつたりという笑みをうかべる。

「……いいじゃない。愛し合つふたりが一緒になるのに……理由なんていらないわ……」

その言葉を口にする事で、彼女は自分に言い聞かせる。

「……テメエは兄貴の をケツに受け挿れられるか？」

「なつ……！」

彼の唐突な言動に、彼女は思考が停止したよつて、目を見開いて体が固まる。

「できねえだろ。俺はできる、兄貴のなんだつて受け入れられる。テメエなんかに兄貴を取られてたまるかよ！」

先ほどまでとは人が変わったような、第三者から見れば悲痛とも取れる、青年の叫び声。

「……ただ女つてだけで、異性つてだけで……俺から兄貴を奪うな！ 俺は兄貴が好きだ！」

「……なら、どうして……」

「またそれか？ 兄貴は死んだだけ、ここにいるじゃねえか」

彼は抱いた頭を示す。

「それは  
」

「兄貴だ！ ここにいるのは兄貴だ！ 兄貴以外の何でもない、紛  
れもない兄貴だ！ 俺の一人だけの兄貴だ！」

泣き叫ぶ。狂つたように。求めるように。間違いを否定するよ  
うに。

「わたさない…わたさない…わたさねえ…！ 兄貴の手も足も  
体も頭も髪も全てもテメエなんかにわたしてたまるかよつ…」

「なんて…自分勝手なの」

喋り続ける青年に、彼女は平手打ちを試みようと腕を振り上げる  
が。

「触んじゃねえ！」

「痛ツ  
」

振り払われた際に青年の爪が引っ掛けたり、彼女の肌がうっすらと  
切れ、鮮血が滲む。

「漫画じゃねえんだ、ご都合主義に叩かれやしねえ。で、あげく自  
分勝手ってか。じゃあテメエは、そのためだけにこんな事はできん  
のか？」

青年は眼帯を外した。

その先を予見して、口元に囁いをうかべて…。

「ひつ  
…  
！」

彼女は悲鳴をあげそうになつたのを堪えて、もう一度【それ】を  
視覚に捉える。

【それ】と比喩するのは適切ではない。青年の眼帯の下は、洞穴  
の様な空洞のみがあり、あるべき物…眼球がなかつた。

「ブレインセックスつていってな、頭蓋骨の眼球部分の穴から  
を挿れて、脳みそを　でかき回すのさ。　で眼球を押し  
込んでヤル眼孔姦つてのもあるらしいが、んな事はどうでもいい。  
重要なのは愛しい相手に頭ん中を物理的に搔き回される至高の快楽  
……テメエは一生わからねえだろつよ」

「……狂つてるわ、本当に

「ああそうさ、俺は兄貴を狂おしい程愛してる。こいつも兄貴が犯りやすい自分で割り貰いた。テメエはどうだ？ 兄貴のために狂えるか？」

嘲りを織り交ぜながらの言葉。

「私は……そんな事にはならない」

「ほらみる」

そして何度目かの嘲笑。

「私は彼に全てを依存したりはしなかつたわ、あなたと違つて……」

私は彼と手を取り合えた、そして生きていけるはずだつた！」

凜とした表情は、その言詞に少なくとも自覺的な嘘が無い事を物語る。

不幸な事に、彼女は勇敢だつた。

彼のような破綻した青年相手でも、不条理に崩されないだけの心の強さがあつた。

「ははは……ひやはははは！」

唐突に青年は嗤う。

狂々と壊れた走馬灯のよつこ。

「何が可笑しいの？」

「たまらねえ　たまらねえな！ 綺麗事の御託並べて吐いてくつちやべつて、おてて繋いでルンルンなんて幻想犯してんだからなつ！」

そして青年は、部屋の蠅燭を一斉に倒した。

「何を　！？」

「我慢大会といこいつじゃねえか偽善者様よお、どつちが兄貴と最後まで添い遂げられるかなあつ！！」

唐突な出来事を前に、一瞬動きの止まつた彼女を尻目に瞬く間に燃え上がつた炎は、床の一部に油でも敷いてあつたのか、電撃的に部屋を赤色に染めていく。

「これだよこれっ！ これが兄貴の赤だ！ 俺の兄貴の赤だ！」

黒い頭髪の上から赤い血をかぶり、燃え盛る火炎の中で、青年は

嬉々として叫ぶ。

「ひつ　！」

部屋から出ずに密集した炎は、煙を吹きながら酸素を奪っていく。  
(に、逃げないと　燃える！？)

幸か不幸か、彼女は冷静だった。

この状況を前にも思考を止める事無く、落ち着いてハンカチで口を塞ぎながら、未だ炎が回っていない玄関へとむかう。  
「よしつ、まだ開くわね！」

ドアが開くの確認して急いで外に出るが、ほんの少しの差で髪に赤い火が燃え移る。

「つ！？」

それに気付いた彼女は、慌てて手ではたいて火を消す。

「熱ツ！」

少し燃えて髪型は均一でなくなり、手には軽い火傷をおつたが、無事にマンションの外へと逃げていく。

「はあつ、はあつ」

息を切らせて周りの住人に紛れて脱出すると、外には既に厚顔無知な野次馬たちが群がっていた。

おそらく誰かの通報で駆けつけたであろう救急や消防が現われると、その支持の元に彼女を含めた住人の避難が始まり、特に大怪我をした人間はいなかつたため、火傷を負った彼女は救急車に乗せられた。

「…………ふう。…………あつ！？」

応急処置を受けて、大切な自分を救えてほつとした彼女は、そこで初めて彼の躯を置き去りにしてきた事に気がついた。  
しかしもう戻れない。

兄弟のいる部屋のベランダからは、悲鳴のような炎が煙と共に空に向かつて昇っていた。

そして……

「ガハッ！ ゴホッ！ グフッ！」

やつぱりだ、あの女は兄貴を置いて逃げやがった！

殆どの面積を炎に寝取られた部屋の中で、青年は侮蔑を込めた言葉を心の中でもらす。

煙にやられた喉は、それを声に出させてはくれなかつた。

俺は間違つちやいない、正しかつたんだ！

その表情は、これから燃え逝く者には似付かわしくなく、達成感に満ちたものだつた。

終わった……これで俺は兄貴のものだ、兄貴は俺のものだ……  
青年は死に直面しているにも係わらず、どこかほつとしたようこぐつたりと力を抜いた。

ああ……兄貴の暖かさを感じたら、濡れてきちまつた……

生地の色が変わつた股間を見て、微笑みを浮かべて呟いた青年は、おもむろに自身を取り出すと、兄の遺体を焼く炎に向けてできるだけの射精を繰り返した。

(後書き)

今回の作品には、ヤマもオチもイミもあると思ひてますし、やめてやめてお尻はいやよ、とも言いません、一応。名前がないのも気にしてない。狂氣コンペなのにあまり狂つてないのも気にしない。グリューンベルグ曰く『誰からも愛されないのは、大きな苦痛だ』と言われても、こういう愛され方はさすがに苦痛に近いか……と思います。こんなんだつたら愛なんて要らない、と思うのは自分だけでしょうか。

本来はブッチ切りの狂いつぶりでアク禁覚悟の予定だったのです  
が、どうしようもなく中途半端な狂いつぶりで、描いた本人も若干  
困つております。

感想、評価、力になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9974a/>

---

Alter Ego

2010年10月8日15時20分発行